

第二分科会「地域経済の活性化」

第2部

皆様、それではこれより、第二分科会「地域経済の活性化」第2部を始めさせていただきます。それでは、登壇されている皆様をご紹介します。皆様から向かって右側より、発表団体、長野県伊那市長、白鳥孝(しろとり たかし)様です。白鳥様には後ほど事例をご発表いただきます。続きまして、兵庫県姫路市長、清元秀泰(きよもと ひでやす)様です。同じく後ほど事例をご発表いただきます。そして今回コーディネーターを務めていただくのは、ジャーナリストで日本文藝家協会会員、日本外国特派員協会会員の三神万里子(みかみ まりこ)様です。

ここで、三神様のプロフィールを簡単にご紹介させていただきます。三神様は、イギリス、ケンブリッジ大学エグゼクティブコース サステナビリティ経営管理専攻を修了。国立情報学研究所、信州大学経営大学院客員准教授を経て、NHK 地域経済番組や国際放送で解説者、ほか地方民放にて地域経済活性化番組設立委員や東日本大震災経済復興番組メインキャスターなどを歴任されております。また、総務省地域循環創造事業交付金審査委員や総務省自治体主導の地域エネルギーシステム整備研究会委員などを兼務されております。それでは、これより先の進行は、三神様にお願いしたいと存じます。よろしく願いいたします。

ジャーナリスト・日本文藝家協会会員・日本外国特派員協会会員

三神 万里子 様

ただいまご紹介にあずかりました三神でございます。第1部に引き続きコーディネーターを拝命しております、どうぞよろしくお願いいたします。

第1部、実はお出にならなかった方もいらっしゃるの、この会の立ち位置について。第1部では地域資源があります、あるいは余剰資産があります、廃校になりましたといった、資産からどうやって産業を作り出して、短期で採算性を高め、事業として回るようにしていくか議論いたしました。民間と自治体との、海外でも出始めているワードで言うところの「ビッグコラボレーション」ですね。民間と自治体が伴走する、あるいは相当関係者の利害調整をしながらプロジェクトとして進めていくという事例でした。

この第2部では、「面にしましょう」「点を線にして面にしましょう」という言い方がよくありますが、では面を作るって何なんだということが非常によくわ

かる事例を議論したいと思います。大変貴重なお話になるかと思しますので、お時間がもったいないので、早速プレゼンテーションをお願いしたいと思います。お席の順でよろしいでしょうか、客席からご覧になって右側ということで、まず伊那市長でいらっしゃいます白鳥孝様からプレゼンテーションをよろしく願います。

伊那市長
白鳥 孝

(1頁)

よろしく願います、着座のままで説明をさせていただきます。長野県伊那市ですが、位置とすると長野県の南部です。諏訪湖から南に名古屋方面に向かっていくところにある、中央アルプスと南アルプス両方とも、全部ではないのですが伊那市の山なのです。非常に広い市域で、668平方キロメートル、東京23区よりも広いというくらいの面積で、その内森林が82パーセントですから550平方キロメートルという、景色はとても良いのですけれども、ニホンジカに悩まされたり、過疎化高齢化、同じような課題を背負っている、そうした地方都市であります。

そうした中で私たちの地域の課題をどういう風に解決するかと、つまり少子化、高齢化、あるいは医師不足、看護師不足、移動困難者、買物弱者、本当に課題は数多ありまして、これの中で人口減少も当然あります。将来考えた時にそうした課題を、今の技術を使って解決していこうと。つまり今いる市民のみなさんがここで安心して暮らせる、たとえ歳をとっても今住み慣れたところで暮らし続けられるような、そうしたことを確保するためには、新しい技術を導入していこうということで始まっております。

(2頁)

それでちょっといくつか事例をお話ししますと、まず「日本の未来のかたち」を伊那市からというところがあります。これは私たちの持っているポテンシャルをどういう風に活かしていくのかという、基本的には1次産業がとても大事だということです。食べるものは自分たちで生産をして、それから森林手当をすることで水を安定的に確保できて、エネルギーも森から出てくる水を使った小水力発電、それから木質バイオマス、ペレットとか薪、これを使ったボイラーの開発をしておりまして、公共施設のボイラーはどんどんペレットボイラーに替

えているという。再生可能エネルギーで賄える場所を作ろうということ、これは市の方針としてあるわけでありませう。

(3頁)

その後のところの、先にテクノロジーの話をしたのですが、こうした人口減少とか少子高齢化、こうした取り巻く環境というのは年々厳しさを増しているという中で、各産業分野における担い手不足、交通、買物、移動弱者、こういうものを解決していくと。よくコンパクトシティという話をされるのですが、これだけ大きなところをコンパクトにまとめるということは土台無理な話ですので、これは時間軸の中のコンパクト化とそんな考えでやっております。

(4頁)

いくつかのプロジェクトを作っております、これは官民共創ということで例えば農業分野の新しい仕組み、スマート農業とかスマート林業、あるいは公共交通のあり方、ドローンによる物流、そうしたことについては三菱総合研究所とか三井住友海上火災、日建設計、こうしたシンクタンクとかあと信州大学、名古屋大学、こうした大学との連携。それから特徴的なのは日本の企業ですね。地元の企業はもちろんなのですが、例えばトヨタ車体とか沖電気工業、ソフトバンク、川崎重工業とか JTB、地元の KOA とかこうしたものに加えて、KDDI とかゼンリン、また NTT 東日本、JR 東日本。こうした一般の企業とアライアンスを組んで、いくつかの課題を進めているということが特徴です。

(5頁)

例えばその中の1つがドローンなのですが、中山間地域でお年寄り1人のみ世帯とかありますけれども、そうしたところは買い物に行くことができない、自分の力では移動することができない。それは市内のスーパーと連携をして、あるところまでは車で持って行って、そこからドローンで近くの公民館なり公共的なところに運ぶと。最後のラスト1マイルについてはボランティアの方が届けるというそんな仕組みを作りました。これは今年で4年目に入っているのですが、実装が4年目ということで、本当に注文の仕方は電話でも良いですけども、ケーブルテレビが非常に普及していますので、ケーブルテレビのチャンネルを使って注文すると。お年寄りのみなさん、スマホについてなかなか入りにくい。ところが毎日テレビを見ているそうした生活なので、チャンネルを使って注文すると。大体500品目くらい注文がありますので、赤のボタンを押すと買い物画面が出てきて、豆腐を何丁、あるいはお刺身を何か食べたいとかサラダはこうだと注文すると、11時ごろまでに注文すると夕方の15時か16時頃にはドロー

ンでそれを運んで来て、その日のうちに食べられるというそんな仕組みができています。決済もケーブルテレビの料金の中で決済ですので、ある意味キャッシュレスということが進んでおります。

それからもう 1 つ、これはちょっと動画がありますので少し見てもらいたいと思います。

(6 頁、動画)

バージョン: ドローン物流の入口はテレビ放送から買い物できるシステムです。自宅にいながら、リモコンを使って買い物ができます。注文が入った店舗では商品のピッキングを行います。ドローンポートのある拠点まで商品を運び、ドローン専用コンテナに移し替えます。LTE の電波を介して、機体の動作は自動制御されています。5 キログラムの荷物をバッテリーを積み替えることなくフライトし、最大 10 キロメートル飛行することができます。

各地域の公民館に自立飛行してきたドローンが降り立つと、地域のボランティアが荷物を取り出します。ボランティアは注文したお宅に荷物を運びます。最後の荷渡しは人の手によって。見守りを兼ねた配達は、コミュニティ機能の再生に向けたこだわりでもあります。

(7 頁)

次に移動困難者、山の中の集落もあれば町場もありますけれど、今までは循環バスを含めてそれで交通を確保していたのですが、やはり乗る人が少なかったりバス停まで遠かったりということで、この仕組みについては全く変えようということで、ドアツードア、自宅の玄関先まで迎えに行つて目的地まで行くという、人工知能を搭載した乗合タクシーを作りました。これによって複数の方が乗合で、例えば市役所に行く、お医者さんに行く、買い物に行くということで、ワンウェイで 500 円です。500 円で利用できるということで、免許返納者、高齢者、障害者、免許を持たない方、こうしたみなさんについては 500 円、もしくは障害者とか返納者は 250 円で距離関係なくタクシーで目的地まで行けるということでもあります。

これは名古屋大学とか未来シェアとか JR バス関東、また地元のタクシー会社とアライアンスを組んでやっております、これも非常に地域のみなさん喜んでくれるわけでありまして、これも非常に地域のみなさん喜んでくれるわけでありまして、ただ時間帯が午前 9 時から午後 15 時までということで、民業を圧迫しないようにということの時間配分となっています。これもちょっと動画がありますので見ていただきたいと思います。

(8頁、動画)

ルーション：予約を受けてAIが乗車場所と目的地のルートを手動で割り出し、効率的に配車します。この日も高齢の女性が通院で活用していました。

インタビュー：今まではバスに乗っていたのですよ、ここバスが通るので。だけどちょっと腰の具合が悪くなってしまって、歩くのが大変になったのでありがたいですよ、本当に。安いしね。

(9頁)

次の事例ですけれども、これは医療困難者。伊那市もお医者さんの数が少なかったりするものですから、例えば往診に行くにしてもドクターが行って帰ってくると1時間とか1時間半かかってしまう。これを解決したり、患者さんも医者に行くのはとても大変なのです。車の手配だとか、タクシーで行くにしても高いし、家の人に送っていってもらいにしても会社を休んでもらって心苦しい思いで送っていってもらいとか、そうしたことがあって。これを解決するためにお医者さんが乗っていない移動診療車、機器をいろいろ搭載して看護師が乗って、患者さんの自宅に行き、いろいろな検査をして準備ができると市街地にいるクリニックの先生とテレビ通話しながら診察ができると。また、薬機法を改正してもらって、オンラインで薬の手配ができるという仕組みを作りました。

これはトヨタとソフトバンクの出資をしてできたモネ・テクノロジーズという会社と、それからフィリップスジャパンと私も伊那市とこの三者で進めてまいりまして、これは今非常に好評というか、全国で十数か所こうしたものが導入され始めています。年内には二十何か所になるという話も聞いておりますので、それぞれいろいろな自治体でお困りの医療関係のところがありますので、こんな事例もあるということで参考にしていただければと思います。

最近ではモバイルエコーを開発したことによって、妊産婦の方が自宅にいて検診ができるということで、大きなお腹をして車を運転してお医者さんに行くということがなくなりまして、非常に妊産婦のみなさんの利用が増えております。

今このモバイルクリニックは1台あるのですけれども、1台では足りない状況になっていますので、今後、来年度に向けてもう1台の導入を考えるべきかなと。このモバイルエコーの他にも心電図を細かく取れるようになりましたので、心疾患の早期発見とか、あとスマホにアタッチメントすると目の写真が撮れて、それを伝送して遠くにいる眼科の先生が初期の診断ができるという新しいものができてまいりました。これもモバイルクリニックの映像を見てもらいたいと思います。

(10頁、動画)

ルーション：医療機器や通信機器が備えられ、血圧や脈拍、心電図などの測定結果は離れた病院にいる医師がリアルタイムで確認します。

看護師：ちょっと胸の音を聞きます。

ルーション：聴診器の音も離れた場所から聞き取ることができるのです。

医師：胸の音は良いですよ。

ルーション：車には看護師が乗っていて、機器を操作。通常のオンライン診療のように患者がパソコンなどを扱う必要はありません。

医師：むくみはあまり変わらないですか。もう1回やってみて。

ルーション：医師の指示の元、看護師が補助を行い、病院と同じようにきめ細かな診察が受けられます。

(11頁)

これがモバイルクリニックであります。買い物にしても移動にしても医療の面にしても、やはり大きな課題がたくさん私たち抱えておりますので、こうしたことを最新のテクノロジーを使って解決していくと。解決していく過程においては、やはり国の制度的なものも大変立ちはだかる場面もあります。こういうのは私たちが前面に立って、企業のみなさんと考えながら国のみなさんとも一緒に解決していくということでもあります。

私たち行政というのは、本当に困っているいわゆる弱者に光を届けるというのが基本ですので、そうしたことを最新のテクノロジーを使ってやっていく。特に新しいものを導入する時というのはお金が大変かかります。

(12頁)

これは国のお金、今はデジ田交付金なのですが、そういう財源を使って、95パーセントは特交もしくは交付税でまかなっておりますので、私どもの市の持ち出しは5パーセントということで、少額なのですけれども解決のためにはそうしたお金も必要だということで国の方にもお願いをしてやっているところであります。

日本を支えるモデル都市ということで、最初に1次産業は大事だよという話をしました。つまり地方都市の私たちの強みというのは、海外に頼らなくてもある程度は生活できるという、そうしたものを持っていますので、こうしたことを考えながら食べるものと水とエネルギーは地元でも賄っていこうというのを是としております。

これは日本を支えるモデル都市としての一例なのですが、朝晩は子どもたちのスクールバスなのですが、昼間は空いていました。これを改造してモバイル市

役所、出かけていく市役所。この市役所はどこにも行って期日前投票もできるし、いろいろな証明書の発行できるしということで、そうしたことに活用。モバイル公民館というの、これもいろいろな機器を搭載しているので、いろいろな地域に行っておじいさん、おばあさんたちがここで筋力トレーニングをすとか、あるいは講演会を遠隔で聴くことができるとかこうしたものもできております。

右下にちょっと小さくてわかりにくいかもしれませんが、これは 200 キログラムもしくは 300 キログラムを運ぶことができるドローンです。これは今川崎重工さんと一緒に開発をしていて、これは今 1 号機なのですが、試作機の 2 号機ができて、また年内にテスト飛行をしようということで。これは標高 3,000 メートル、先ほどの山小屋も私たちはいくつか持っていますので、ヘリコプターがなかなか手配できないような状況下でこうしたもので荷物を運ぼうと。あるいは遠隔の離島についてもこれは運ぶことができます。200 キロ、300 キロを 100 キロメートル以上運ぶということで設定しておりますので、これは新しい技術として農業とか林業とか、あるいは土木関係、山の中の工事現場とか、あるいは災害時、こうした時に使えるのではないかとということで私たちも期待しております。

あとはこの左側に 2019 年から 2022 年のアワード関係がありますが、こうしたことは一定の評価をされているのかなということでもあります。やはり地方都市には課題がたくさんあって先行きが非常に不透明で不安があるということが言われてはいるのですが、一方では非常に生活しやすいし、私たちは安心して暮らすことができる地域でもあります。そうしたところをもっと私たちは自信を持って、さらに一歩二歩進めていくと。そうしたことが私たち地方都市の強みではないかなと思っておりますので、これからも職員と一緒に、また総務省の制度を上手に使いながらやってまいりたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

三神さん：ありがとうございました。問題解決型ですね。特に人口動態との関係で言うと、今日本は減っています。だけど実は先般、国連がレポートを発表し直したのですよね。2050 には世界も人口縮小しますと。ところがもっと早いタイミングですよと発表したレポートがイギリスのランセットという医学雑誌で、その推計だと 2040 なのですね。だから今 2023 ですけれども、今なさっているのは、自治体全域を民間企業とのパイロットプログラムフィールドにしている感じですね。つまりサービス開発であって、これは将来的には恐らく輸出産業に育っていくだろうと常々感じております。特区の使い方ですとか、特区的にうまく隙間を縫ってプログラムを立ち上げるのがすごく得意な自治体でいらっ

しゃいますよね。川の上はドローンを飛ばせるので、何でこんなに早くドローン配送を実装しているかというところという種明かしで前から始めていらした。今日は出ていませんけれどワインバレーなども千曲川エリアが特区扱いでやっていらっしゃいますね。

白鳥市長：千曲川ではなくて天竜川。

三神さん：ごめんなさい、失礼しました、ドローンは天竜川ですね（ワインが千曲川）。私は長野県出身なのに間違えました、ものすごく怒られてしまうかもしれない、申し訳ありません。

1つ質問なのですが、今データを取ることが民間企業にとっては非常に重要な資産になっていて、だけどこれは自治体がパイロットプログラムを企画しもし官民共同で（サービス開発を）やった場合、究極的にはデータの所有権は住民にあると個人的には思うのですね（データの所有権概念については各国が有無も含め議論中）。そうするとビジネスモデル的に知財で売れるのではないかと、このあたり収益源にできるのではないかという疑問があるのですが、どんな風にお考えでしょうか。

白鳥市長：私も民間出身なものですから、常にそうしたことは頭に1番大事な部分として置いているのですが、行政って良いことをやって視察に来て横展開というのは当たり前みたいになっているのですが、知財のある場所というのに対してのお金の動きというのが全くないのですよね。

三神さん：同感です。ある自治体ですごく苦労してパイロットプログラムの作り上げたものが、よそでも使い始めればお金のやり取りもないですし、あとはもちろんそれが輸出産業、コンサルティング分野やサービス業として輸出できるかもしれないのに、例えば伊那モデルみたいな、これから先どんどん人口が減ってくる国や自治体、似たようなスケールのところに展開できるかもしれないのにそこは今ないのですよね。

白鳥市長：ないです。先ほどのモバイルクリニックはフィリップスジャパンなのですけれど、フィリップス本体も関係しているので、世界戦略を立てているのですよね。ここまでうまく行って、お医者さんがいないような本当に国の中でもそれを活用して助かる人がいっぱい出てくるということ。今伊那モデルというクレジットを入れてくださいね、くらいしかできていないので。

三神さん：それだけで良いのでしょうかという疑問がありますね。今日は総務省の方がいらっしゃると思いますので、何かちょっとこれは考えどころではないかと個人的には思っておりますけれど。

白鳥市長：私も本当に悩んでおります。

三神さん：良かったです、首長の方もそうお思いで。私あまり阿漕なことを言うてはいけないかなと思ってしまったのですが、当然の権利ではないかと常々思っております。ありがとうございます、また詳しくは後半のディスカッションでお伺いできればと思います。

続きましては、本当に今日は場所を提供していただきましてありがとうございます姫路市長様です。清元秀泰様からプレゼンテーションをお願いいたします。

姫路市長
清元 秀泰

(表紙)

皆様本当に播磨の中核市、姫路市によろしくお越しいただきました。私からは「グリーンとにぎわい創出で拓く姫路の未来」ということで、スライドの方は出ていますでしょうか。よろしく申し上げます。

冒頭のこのスライドは、姫路城の東側にあります、霧の彫刻家中谷英二子さんという方が姫路美術館の前で霧発生装置を出していただいて、昔の陸軍弾薬庫だったものを改築した美術館ですけれど、お城周辺には大変素晴らしい施設がございます、さらに付加価値を高めながら 2040、2050 年に向けて進めていこうとしております。

(1 頁)

姫路市の現在進めている都市像ですけれども、「ともに生き ともに輝く にぎわい交流拠点都市」ということですのでけれども、私自身 5 年前までは平成の時代医師として働いていたということ、また東日本大震災の復興事業に関わって命の重要性とその命を支えていく暮らしの重要性、さらにその暮らしが連続することによって英語ではライフという言葉で帰着していくわけですけれども、こういった命、暮らし、一生の市政を展開する。

その中で 3 年半コロナで痛めつけられました。これからの街をもう一度リスタートさせていくには活力があるだろうということで、その活力に我々といたしましては先人が残してくれた世界文化遺産である姫路城や、また臨海部に展開する重厚長大な鉄鋼業を中心とするような製造業、これをグリーン化すること、デジタルで集約すること、こういったことによって活力を上げていきたいという風に考えております。

(2 頁)

まず賑わい創出という点で、姫路も面積が 534 平方キロメートル、人口 53 万弱ということで、中核市でございますけれども山あり離島ありということで日本の縮図でございます。しかしその中心は黒田官兵衛、豊臣秀吉、そして家康の孫娘である千姫の居城であった世界遺産姫路城。この姫路城のコンテンツを、日本を代表する世界遺産という形で、日本で 1 番最初に世界遺産登録をさせていただきました。この会場を 9 月 16～18 日は特別版お城 EXPO in 姫路ということもさせていただきますし、それに加えて様々な文化事業アーツ&ライフプロジェクト、先ほどの霧の彫刻家中谷さんの展示もでございますけれども、5 年連続で関西万博や瀬戸内国際芸術祭との連携も踏まえまして、今年はチームラボが様々な展示を展開していただいております。

皆様が今日来ていただいておりますアクリエひめじですけれども、2 年前に完成いたしました。こけら落としの年はウィーンフィルハーモニー、今年はベルリンフィルがやってまいります。本当に世界を代表する芸術の場所に生きる、こういったところを 30 周年の記念事業として進めていこうとしております。

(3 頁)

また、姫路城もみなさん見ていただいている方もたくさんいらっしゃると思いますが、1 つはカーボンニュートラルの象徴として石井幹子さんという世界的照明デザイナーの下で、ライトアップを昨年、LED 化を行いました。LED というのは光の 3 原色で色を作るわけですがけれども、その色味を変えることによっていろいろな光のショーをすることができます。さらに消費電力を 5 分の 1 に抑えるということから、これをカーボンニュートラルの象徴という形にしているのですけれども、さらに駅前からお城まで 800 メートルの大手前通りを歩行者利便増進道路として指定するとともに、居心地が良く歩きたくなるまちなかを目指すため策定した「ウォークブル推進計画」は、第 1 回まちづくりアワードにおいて国土交通大臣賞をいただきました。この大手前通りを、今年 11 月 22 日から約 100 日間、夜のはこみちという形で光のショーを連動させて、さらに賑わいを創出していこうとしております。

(4頁)

「夜もお城をピカピカさせていてエネルギー問題はどうかのだ」というご意見もありましたけれども、現在再生可能エネルギー100パーセントでこのゼロカーボンキャッスルを推進しておりますし、もちろん周辺地域も含めて脱炭素という形で水素やEV化を進めております。

また、姫路市の臨海部を含む播磨臨海地域は、製造品出荷額が全国第2位の産業集積地でございますが、一方で、兵庫県全体における約半分の二酸化炭素を排出する地域でもございます。ただこれは弱みではなく伸びしろと考えております。日本製鉄の水素を使った還元製鉄はもとより、川崎重工業の液化水素運搬船「すいそ ふろんていあ」号によってオーストラリアからブルー水素が供給されるなど、各企業の脱炭素に向けた強力な取り組みと同地域に整備予定である播磨臨海地域道路の整備効果とが相まって、水素拠点を形成することにより、未来志向のカーボンニュートラルポート、そして環境都市の実現を目指しております。

(5, 6頁)

今日は時間の関係で農林水産に関する取組でありますとかそういうことを申し上げませんが、今急速な円安という中で、インバウンドを含めた姫路のキラコンテンツ、様々な離島や山間部や、そういった緑あふれる地域に移住定住政策を進めていくことと、この臨海地域における水素化を進めることによって、2025年の関西万博を契機に、2050年までグリーンで、そしてデジタルを使いながら持続的な新陳代謝を求める脱炭素社会を形成していこうということでございます。

明日のフィールドの視察を含めまして、姫路の街をゆっくり堪能していただきますことをお願い申し上げます、私の発表とさせていただきます。ご清聴どうもありがとうございました。

三神さん：どうもありがとうございました。今、主に脱炭素の切り口でお話をくださいましたが、ウォークブルタウンというところ先般、認知症基本法が議会を通過しました。日本でも初めて認知症対策というのが、基本法ですから全自治体がこれに基づいていろいろこれから政策を練っていかねばいけないという時に1つキーになるのが、人をとにかく歩かせると。健康な生活を送らせて認知症になるリスクをできるだけ下げるということも、実は複線的にこの水素中心の街の上に今政策として進めておられる。さっき実は控室でちょっとお話をさせていただいた時に、やはり元々お医者様でいらっしゃるの健康管理

のそういったキャッチコピーをいち早くウォークアブルというコンセプトを、このインフラにプラスアルファで入れておられた面もありそうですね。

海外の動向と照らしてみた時にどういう流れに乗ってくるかという、実は今まだ世界的な規制になっていないのですけれど、都市の格付けという恐ろしいものが今、研究されているのです。何かというと、いわゆる持続可能性。もちろんエコもありますがレジリエンス格付けと言う概念です。レジリエンスというとみなさん災害に対する耐性という感覚になってしまっていると思いますがそれだけではなくて、人々の健康。長寿化しても何とかうまく生涯やっていけるような町なのか。それには例えば環境対応がきちんとしているのか、あるいは災害対策ももちろん入っています。そして人々が普通に生活している状況で医療費が下がっていくようなそういったものがきちんと実装されているか、本当にいろいろな項目があつてですね。

何でこんな話をしているかという、最終的にこれがちゃんとしている都市は、産業が拠点を作る時の目安にするような保険の格付けにまで影響してくるということが実は研究段階で、世界中でそれこそパイロットプログラムで都市実験が始まっています。規制的な具現化はたぶん10年以内ではないかなというスピード感ですので、今日のお話は何かどっちも先取りして、こういった規制の流れを先に読んでいращやるのかな、なんていう風に思うような面的な動き、そういう位置づけになろうかと思えます。

こうした面的なものは一般市民にある意味わかりづらいですね。最初の伊那市の事例の場合は（線としては）市民にわかりやすい例ですけれど、あまりにハイテク過ぎて、テクノロジーで先端なことに自治体がかなり気配りし、予算をつけ研究機関とコラボしということは、なかなか市民にはわかりづらい。役に立った時点で初めてわかるという事例ですね。

姫路の場合は本当に今ある産業にとっては、カーボンニュートラルは一生懸命やってくれているなという風にわかるけれど、一般市民にはわかりづらいところがある。だけどやはり続けなければいけないし、ものすごく壮大なスケールでやっていくタイプの地域経済活性化なのですよね。

ご質問ですが、プロジェクトマネジメント的には相当壮大すぎてやりづらいのではないかということと、あとはどうしてもよくあるのが、どこかで見たことがあるプロジェクトに見えてしまう。この中でどうやって進め本当にこれが地元の独自性と繋がっていくのか、このあたり苦心していращやるのではないかなという風に思っております。ご質問が漠然としたものになっているのですが、あまりにもやらなければいけないことが壮大である状況においてのご苦労、あるいは突破のされ方、このあたりでご意見がありましたらお伺いできればと思います。お答えになりやすい順番でお願いいたします。

清元市長：僕の方から少し補足でよろしいですか。今日はみなさん会場に来られている方は、このアクリエひめじという場所にも来ていただいていると思うのですけれども、ちょうどここも姫路駅から 800 メートル離れています。お城に行くのも 800 メートルです。前任の市長からウォークアブルな街というものを引き継いだ時に、このハードインフラを本当に先ほど三神さんがおっしゃったように健康な町にしていくにはどうすれば良いのかということをお話を5、6年前に被災地復興している中でお話しいただきました。

東北大学と JR 東日本の共同研究で、大体健康な人、例えばメタボになりにくい、認知症になりにくいと言った時のキーワードは 800 メートルから 1.2 キロメートルです。ここをいかに歩かせるかということが健康な町になります。それ以下になると運動量が少ない、3 キロメートルになるとパークアンドライドではなくてキスアンドライドとかという形で送ってもらったりとか、歩かなくなってしまうのです。

実はこの隣には病院もありますけれども、病院は平均在院日数を短くするのはすけれども、とにかく手術の後歩くことが 1 番のリハビリだという風になっています。認知症についても、歩くこと、しかも楽しく歩く。ここでコンサートをやるのにワクワクしながら歩く。コンサートを見てワクワクして帰る。姫路城を見に行くワクワク感、そして寄り道をしながらぶらぶらして、気がついた時には 1 万歩以上歩いている町が健康な町になるということは、被災地の復興でどこに駅を作るかということをお話を JR 東日本とやってきたエビデンスに基づくまちづくりだということで、国土交通省もまちづくりアワードの第 1 回大賞に選んでいただいた大きな理由でございます。

そういう意味で、観光のためにこれを行っているのだらうということも 1 番の 1 つの目的ではありますけれども、健康な 50 万人の人口があるからこそ、臨海部の労働力不足にも対応できるという意味で、まちづくりにライフというキーワードを入れているというのが我々のまちづくりです。

三神さん：ありがとうございます。歩いていて楽しいかどうかは、先ほどのレジリエンス格付け的な考え方でもちょっと違う表現なのですが、出てくるのですよね。やはり過ごしたいなと思える街かどうか、文化的な切り口もあるのですけれど。

あと本当に現金なことを言ってしまうと結果的に医療費が下がります。今軽度認知症も非常に問題になっていて、若年層が増えているのですよね。現役世代が、今 60 歳以上まで働くのが当たり前になっていて、認知症のリスクを下げながら働き続けなければ経済が持たないという状況で、都市から面的に入っていると

いう。しかも姫路城、実はロマンチックで、デートしたくなるという意味では若い方も歩くような仕掛けづくりになっているというお話ですね。

すいません、私が差し込んでしまって。伊那市の場合はいかがでしょうか。

白鳥市長：先ほどちょっと触れたのですが、総務省の地域活性化起業人交流プログラムというのを使っていて、先ほどのいくつかの事業を進める上において、市役所の職員だけではとても無理です。例えば今いろいろな企業ともプロジェクトを組んでいるのですが、一方でさっきのプログラムを使って企業から派遣をしてもらっています。今来ているのはソフトバンクと富士通とインテックとか、そうした3、4人のみなさん。あとJTBも来ています。いろいろな企業のみなさんが出向で3年くらい来てもらって、大きな課題については持ち帰ってまた本体でいろいろな解決策を練ってくるという、そんなようなことの繰り返しでやっていますので、民間と行政が上手にコラボしていくという形ができていのかなど。スタートアップの時のお金はどうしてもかかりませんが、知恵も出さなければいけないのですが、そこら辺は国のデジ田交付金等を使いながらやっているということですね。

私たちは常に目標値を決めています。いつまでにどこまでに達するのかということを決めていかないと、今一生懸命やっています程度では答えは出ませんので、常に目標を立ててやるということ。それから目標も具体的な数値を持ってやるということをやっています、なかなか難しい場面もありますけれども、そうした時にはもうテコ入れをどんどんしながら形をいろいろ整えていくと、そういうやり方ですね。

三神さん：今やっているパイロットプログラムはあまりに先進的過ぎて、目標値をどの要素の何の数値に置くかということ自体が壮大プロジェクト、面的プロジェクトによくあるのですが、これは例えば具体的にどういうことを目標値としますか。役所の人事評価にまでドラスティックに影響できるのでしょうか。

白鳥市長：そこまではしていないのですが、民間だったらそこまでたぶんやってくると思うのです。私自身が非常にこう忸怩たるものがあるのが、頑張っても良い結果を出して本当に地域のためになっていっても給料が変わらないと、これが公務員なのですよね。特別に昇格ができるかということそれはなかなかできないという。これは異常なジレンマだし、競争力とかやる気についてもやはり削がれてしまうのかなというのがありますけれども、今の制度では難しいかもしれないですね。

先進事例だからこそ目標を立てにくいというのは事実です。ただ「実験では絶

対終わってはいけないよ」と、「実験から実装に早く持っていけ」と。実装に入っても当然変更は出ますので、それはその都度修正を加えていけば良いし、これはひいては市民のため、あるいはその地域のため、国民のためというそうしたところに還元できますので、そうした思いは持ちながらやっていくのと、逆に数値化する目標値を立てられるものもあります。

例えばCO2削減という分野においては、伊那市では「伊那から減らそうCO2」ということで、令和7年までに一般家庭電力の53パーセントは再生可能エネルギーに変えるという目標を数年前に作って、それを今実行していますね。今36パーセントまで来ています。これは小水力発電だとか、あるいは木質のペレット、ボイラー、木質バイオマスを使っていく。あと屋根乗せのソーラーパネル、あるいは太陽熱を使ったり、LED化をどんどん進めるということをやっている、何とか53パーセントを達成して、その次は100パーセントを目指して次の段階に入っていくということが目標で、具体的な目標値を立てていますね。

一方では民間企業もそうした歩みを同じようしてもらわないといけませんので、経営者協会とも話をして、民間企業はどういう取組をしていくのかということの具体的な検討に入っているところですね。立てにくいものもありますし、具体的に立ててそれを粛々と進めていくということもあるという、そんな状況ですね。

三神さん：ありがとうございます。姫路市の場合は、私の先ほど、勝手な解釈で、例えばウォークブルタウンにする場合だと健康診断の結果が良くなるであるとか医療費が削減するであるとか、さらに有り体に言ってしまうと健康保険ですよ。そこのパフォーマンスがどれだけ上がるかというところで数字に置き換えやすいかなという気はしているのです。例えばロマンチックな街ができれば、もしかするとカップル誕生が増えるかもしれないし、出生率に影響があるかもしれない。あとはCO2削減ですよ。

アートの、文化的なことも相当様々、どういう影響があるのか一見測りづらいことも、都市開発レベルの施策でやっていっちゃう。目標値設定、プロジェクト管理の難しさもあり、自治体の人間がどこに向かっているのか明確にしてリードしていかなければいけない。このあたりはどんな風になさっているのですか。

清元市長：姫路市のももちろん総合計画には全て数値目標とかを入れてやっているのですけれど、コロナで評価が困難な部分もありました。例えば観光入込者数とかそういったところを単純に増やしていけば良いとかということももちろん数値としては出しているのですけれど、1つは姫路はこの会場に来ていただい

たらわかりますように、新幹線のぞみが止まってしまいます。神戸から新幹線に乗ると15分ですね。大阪から30分ですから、姫路城だけ見てピュッと広島に行ってしまうという通過型観光が非常に多いので、いかに滞在型、体験型プログラムを推進していくかという数値目標を置くことも必要であると考えています。

姫路には実は中核市播磨のいわゆる圏域として、姫路だけが良いではなくて播磨のみなさんと共に交流人口を増やしていかなければ、基本的に姫路ナンバーをつけて生活していただいている方が兵庫県に約150万人いらっしゃるわけですね。その中核市としてやっていくのに、世界遺産の姫路城だけではなく北前船の日本遺産であったり、西の比叡山とも呼ばれる、いわゆる西国33か所巡りの書寫山圓教寺であったり、日本の近代資産であります銀の馬車道 鉾石の道、そういった日本遺産。あと赤穂には塩の文化もありますし、温泉地もありますし、離島から食文化、例えばGIはりまと呼ばれるようなお酒の発祥地としての誇りもあります。

こういったコンテンツを連携してもらって、我々が今1番目標にしていることはいかに滞在型の観光客が来ていただくかということ。私は姫路を歩いている外国の方によく話しかけて、「なぜ姫路に来たのですか」と言ったら3分の1くらいの方が「姫路に来たって、ここは京都ではないのか」と言われたことがあるのです。京都から新幹線で1時間で来るのですね。観光客は実は京都がいっぱいだったのでホテルは姫路になったのだけれど、京都府姫路市だと思っている人は結構いらっしゃいます。もっと言うならば大阪府姫路市だという人もいらっしゃるのですね。

考えてみれば僕も上海に行った時に、空港から着いて1時間くらいバスに乗せられて、ここほんまに上海かみたいな田舎に連れていかれたことがあるのですが、それくらいいわゆるツーリズムとかも考えた時に山あり海あり美味しいものありお城もあると、まさか姫路城に降りてきた人が「二条城だと思っていなくていいですね」と言ったら、「いや、二条城は素晴らしい」と1人言った人がいたのでびっくりしたのですよ。

だからそれくらいやはり我々は広域で連携をしていくことと、本当に人口減少すれば隣の736床の病院も含めて播磨は1つでみんな分担していくというようなことも、交通とか医療とかもいかにどれだけ交流人口が増えていくかということも新たな指標にもしたいなと思っている次第です。

三神さん：どちらの自治体も、やっていらっしゃることは時間の価値の最大化ですね、面でアプローチしていらっしゃいますけれど。あとは面積や空間感覚の修正。データで言うと日本は全国土を足してもカリフォルニア州より小さい、みなさんその感覚おありでしょうか。すごく狭い中で、その中でいろいろ細かくやっ

てしまっているところもありますね。だから広域連携と言いながら、他国だと車で平気で移動している距離感覚であつたりもするわけです。

あとは過疎だ高齢化だと言っているのですけれども、ドイツやフランスは人口が8,000万、6,000万という世界なのに日本より面積が大きいのですよね。そのあたりの感覚の修正期に入っているのかもしれないですね。

清元市長：そうですね。もう私も本当にそういう意味では、53万人弱ですけれども、いわゆる欧米の町で言うとグレーターロサンゼルスとか、僕はテキサスにいたのですけれどグレーターサンアントニオで、市域には確かに50万人くらいしかいないのだけれど、圏域で100万人いたら、みんなでその圏域で交通であつたりとかをやっていく。産業もまさに通勤圏で、いわゆる100万圏というもの活躍を分担していく時代ではないかなと思うのです。

そういう意味で、姫路市は中核市の中でも大きい方ですから、播磨の中心地ということをお忘れずに連携することを大切にしているということです。

三神さん：伊那市の場合は、テクノロジーパイロットプログラムの中心地のようになっていますが、着想や広域連携、今までの感覚を変えていく時は、相当アイデンティティが重要です。自分たちはどこで中心になると、どこで自分たちが権限を握るといふ、そのブラッシュアップが必要になってくると思うのです。そもそもこんなにプロジェクトがたくさん集まるようになったきっかけというのは何があったのでしょうか。アイデアはどこからがスタート地点だったのか。

白鳥市長：それぞれの部署から発想が出てくる、私自身が民間であつたということもあるのですけれど、「失敗は良い」と。公務員は失敗を一番恐れるのですよね。だから進んでしまって1歩前に出ていないとありがちなのですけれど、横の自治体を見て遅れていないか、出ていないかという、昔から言われているのですけれど。「失敗は良い」と、新しいことをするのに失敗は付きものなので。「失敗はしても良いけれども、原因はちゃんと探ってくださいね」と。あるいはチャレンジをして答えを出すにしても、「失敗は良いから失敗は恐れなくて良いよ」と。だけど同じ失敗はしないようにするということと、「その失敗というのは隠さないでみんなに教えて欲しい」と。そうすると違う職員も同じ失敗をしないようになりますのでね。

それを今までずっとやってきて、発想、着想が自由に出てき始めています。だからドローンの物流なんかも課題解決で職員が頭をひねっていると、こういう方法はどうか、あるいは自動運転はどうなのかということで、いろいろな総務

省から始まって国土交通省とアライアンスを組んでやっていくということがあちらこちらで始まってきたのですね。そうした時にドローンだったら街の家の上を飛ばしては駄目ですよ、なんてのがあった時に、では川の上は良いのではないのという発想でやっていくと、国土交通省に行っているいろいろ打合せをすると「これはオッケーですね」と。では川の上を飛ばすようにしましょうねという風なことで、次から次へと職員からのアイデアが出てくるという感じですね。

ただ民間企業の方に行って、「伊那市と一緒にこんなことがしたいのでやってください、チーム組んでもらえませんか」なんて最初行ったのですけれど、それは門前払いです。大体伊那市はどこだという話から、担当者がとてもこれでは無理だという話の中では、では私も行こうということで、市長が行くとある程度の人が出てきてくれて、気持ちを伝えていくとかなり前向きになってくれて。それからいろいろな企業のみなさんと組めるようになってきたというね。今は逆に企業の方から「こんなことがあるのだけれど伊那市さんやりませんか」という提案もいただくようになったのですね。だから失敗を恐れずにチャレンジして原因を分析して、その繰り返し。これが総務畑でも企画でも農林でも福祉関係でもいろいろなところから出てきて、それが集まったのが先ほどちょっと話をした一部になります。

三神さん：なるほど。実は事業再生で脱皮した福井県の某上場企業は似たようなことを最悪の時期にやられたんですよ。地方都市って長男長女ばかりではないですか。そうすると、別に地方自治が専門だから役所に入っているわけではないのですよね。その会社の場合はそこがたまたま代表的な会社だったから就職した。何が言いたいかというと、いろいろな専門分野の方が本当は「自分は情報工学が専門だったけれど長男だから戻ってきました」という方が実は集まっている宝庫だったりするのです。

今おっしゃった失敗を恐れる体質というのは、役所はどうしてもあるのですけれども、失敗オッケーと。むしろ経緯の分析を奨励するという同じことをその会社もやったのです。「本当は言いたかったことがあるのではないの」と、「うちの会社はもっといろいろできるのではないの」ということをやった途端に脱皮をしたのです。大変なイノベーションを遂げたのが理由です。そもそもイノベーションって失敗がつきものなのですよね。失敗を恐れるカルチャーだったら全く新しいことができないのです。そういったカルチャーをまず醸成する、しかも自治体でという。一瞬語義矛盾のようなところも感じられるのですけれど、今それをやらなければいけないフェーズに来ているのかなと。

ただあまり無謀なものは、当然スクリーニングはかけますよね。このあたり、あまりに無茶なものはどなたが采配、スクリーニング、あるいはシステムでやっ

ていらっしやるのか。どんな風にやっぴらっしやいますか。

白鳥市長：基本は市民益ですので、今の時代の市民に対しての益と、それから将来にわたってどうあるべきか、ということを考えていくと、最終的には私のところでこれはやろうか、やるまいかということは議論を重ねた上で決めます。

今までの中でやめようと言ったことは恐らくないのではないかと思うのですよね。みんなトライしてきて形になっているのと、最初荒唐無稽なアイデアでこんなことが本当に必要なのという議論はしたことがあるのですけれど、それでもやってみると市民に寄り添うような形に段々収斂していくというのがありますので。悩んで悩み通して答えが出たというのは間違いだらうなということが私の思いですね。

三神さん：姫路市の場合は、ミッションが壮大で、みなさんが来て良い時間が過ぎせるようにするとか、歩きたくなるといったこういう非常に抽象的とも思われがちなコンセプトを、どう計画に、あるいは実際に働いている方たちの実践可能な実務レベルに落とし込んでいくかという、ここが非常に難しそうな気はするのですけれども。

清元市長：そうですね。たぶんウォークブルを進めていくのにも、前の市長さんは大学の教授でも都市工学が専門家だったので、やはりヨーロッパの都市とか他の発展する都市は駅前の賑わいであるとかを大切にされて、高架事業に合わせて駅前整備を始めたわけですね。その中で車道から人の道を広げることによってこれからは駅前のウォークブルが必ず、たぶんご本人の信念もあって進めてこられたのだと思うのですね。

あとで聞いてみると、岡山の駅前などの原図を作ったのも前の石見市長さんであって、私は「良いものができたからそれをソフトで健康な街にしてみないか」というお誘いを中央にいた時に受けて、5年前に市長になったというところもあるので、僕の功績よりもこの街をこういう形にしましょうというデザインは非常に先人の目先の利くと言いますか、都市工学の権威だなというところでありがたかったかなと思います。

ただコロナになって思ったことは、今日来られている方々も視聴されている方もですけれども、我々のこれから10年、5年かもわかりませんが、低出生率をどれだけ食い止めて、逆に出生数を少しでも上げていけるかという兆しくらいを見せないことには、もう日本の未来はないのではないかということを経験認識で持たれていると思うのですけれども、この11月22日から大手前通り、このウォークブルなところを100日間イルミネーションにするというのは、デ

ートをして欲しいからなのですね。これは播磨、近畿のデートスポットになりたいと。

みなさん、11月22日は何の日かというと良い夫婦の日なのです。この4年間姫路市で、婚姻届が4年間特異的に多かったのは11月22日です。人と人との出会いのためにこのウォーカーブルを使いたいと思っているわけで、まさに観光政策でやっているのですかと言われるのですが、これは少子化対策で始めていますということです。姫路の街は出会いの街だというコンセプトでこれから5年間死にもの狂いで、少子化対策の1番最初出会いからやっていくということ。これを世界遺産を使ってやりたいというのが今の偽らざる気持ちです。

三神さん：ありがとうございます。実はウォーカーブルタウンは認知症と今の少子化対策というお話がありましたが、もう1点孤独化対策にも関連します。高齢者が孤独になると、孤独死が起き資産価値が落ち、そして街の価値が落ちということが起きますね。今日は男性が多いので大変申し上げづらいのですが、世界中で男性の孤独化が大変医療費に悪影響が及ぶとされています。理由が、私個人の意見ではないですよ、学術論文で指摘があるのですが、見栄があり、自分のピーク期のイメージで体面を保ちたいので、小さな嘘をつき始めて表にどんどん外に出られなくなるということがあるそうです。

そういった問題もこの「面」で誘導して、本当に具合が悪くて出てこれなくなっても手当が伊那市のように届いてくれる、遠隔で医療が受けられる。出かけることが恥ずかしいとか苦痛だとありとあらゆる面で思わせないと。そういったことを違うアプローチで2つの自治体はやっていらっしゃいますね。いわば原始的な意味での基盤です。私たちは今仕組みが壊れている中で生きているような気がいたしまして、それは若い世代がそもそも結婚しないとか出会わないとか、また引きこもってしまうということになっているのかと。数値化しづらい領域に見えますが、因子ごとに目標値に置き換えて管理をしていかれるということですか。

清元市長：そうですね。もちろん医療費とか教育費とか給食の食材費とかの無償化の議論ってずっと全国子どもど真ん中で、そういう話ばかりになるのですが、最も基礎自治体は人を大切にしていますということを伊那市でも姫路市でも打ち出していくことが安心な街に繋がってきて、地方に人が来てくれる1つの形になるのではないかなと思うので。

全方位と言うと失礼ですけど、子どもだけ突出して何かやればと言っても、いつかは子どもが巣立って行ったら今度はゴーストタウンになってしまうかも

わからないので、やはりどこまでも寄り添ってくれるまちづくりというのが、そういう意味では非常に重要で。だからデジタル田園都市の心はそこにもあるのではないかと。

三神さん：ありがとうございます。なお、伊那市の妊婦さんについて。今産婦人科がなくなっている自治体が多いですね。恐らくみなさんのところも。病院自体がなくなっているところも多いと思うのです。これは絶対的に出生率に影響があると思うのですよね。でも妊婦さんも遠隔で、在宅で医療が受けられるということになると、具体的に出生率への影響は出てきていますか。それともこれからという感じですか。

白鳥市長：恐らくこれからだと思いますね。最近というか数か月前から、昨年から始まったのかな。非常に人気が上がっていきまして、普通のクリニックの先生が診療車の予約ができなくなっている状況なのです。産婦人科は総合病院の伊那中央病院というところがあってそこに数人いますし、民間でも2つ今市内にありますので、ある程度カバーはできているのかなと思うのですけれど。先生方もその方が早く患者さんをこなせるのですよね。

三神さん：病院経営側にもメリットが相当あるわけですね。ちょうど姫路も病院を統合したというお話がありましたけれど。

白鳥市長：医療点数が低かったものですから、これを変えてもらったのですよね。実際の往診と同じように、今770くらいですね。最初170くらいしかなくて、それを今もっと上げてもらったので。上げたことも先生たちは本当に助かったという話だったのですけれど、両方とも良くなっているのかなと思いますね。

三神さん：この仕組み、すぐ他の自治体でもお始めになった方が良いのではないかと思います。難しいですか。

白鳥市長：医師会のね。

清元市長：そうですね。本当にこの制度というのは、それこそ20年くらい前からパイロットスタディという形で、なんぼでもやっていたのですけれど、全然進まなかったのですけれど、コロナになって遠隔診療システムが割と、例えば初診でもオッケーなんていうのはこれまで医師会の反発が強かった部分もあるのですね。コロナになって限界集落みたいにもう医療が駄目になってしまうかもし

れないと思って急に、ガラパゴス島から今一気に加速した感があります。逆に伊那市さんはそこをすごく看護師さんとかをうまく使われていると思いますね。

三神さん：なるほど、ありがとうございます。興味深いお話で私から多数ご質問してしまったのですが、会場のみなさんからご質問を伺わなければいけないと思うので、みなさんいろいろそれぞれの自治体でお抱えの問題もあろうかと思えます。会場からお願いいたします。

司会者：残り時間もわずかとなってまいりましたが、お一方くらいはお受けをしたいと思うのですが、ご質問いかがでしょうか。

質問者（会場）：地元の兵庫県の小野市長の蓬莱でございますけれども、長野県の伊那市長にお伺いしたいのですけれども、本当に素晴らしい先見性のあるチャレンジを見まして、私も民間出身でありますけれども、市長の話聞いていまして、私は子どものように思いまして大変関心をいたしました。

その中で先ほど清元姫路市長さんからも関連してありましたけれども、これからの医療の戦略は私も病院を持っていますけれども、いわゆるコロナ禍におけるこういう新しいシステムによる医療というのは伸びてくる可能性もあるのですけれども、一方で病院経営を確実にして、黒字経営して急性期医療を守っていくという問題と、あるいは弱者に対してきめ細やかな、これはある意味では少子化とも連携するのかもしれないし、あるいは高齢化社会にも関係するのかもしれないけれども、そういう風に相互的にこの仕組みを作っていくことは大事だと思うのですけれども。

そこでちょっと伊那市長にお伺いしたいのは、このシステムをやられた時に、先ほどちょっと関係あるのですけれども、本音のところはすっきり行ったように見えるのですけれども、医師会とのところはどうなのですか。これが1点。

2点目がこのモデル都市を目指した、あるいはこの新しい仕組みといった時に、全く県の姿が見えていないのですよね。いわゆる基礎自治体としていろいろな戦略で新しいアイテム、あるいはチャレンジを職員にはやらせて、それはそれなりに成功していることも多いと思うのですけれども、私も国交省あるいは総務省等々との話し合いであって、県の人がおったらご容赦願いたいですけれども、全く県が介在してやると物事が進まないのだけれども、それは勝手にやるといろいろな話が進むと。長野県はどうなのでしょうかね。この2点ですけれど、答えにくかったら答えなくてもよろしくございますので。

白鳥市長：後の質問からちょっと答えたいと思うのですが、総務省なり国土交通省なり厚労省、いろいろなところに私たちのアイデアを持っていっているのです。最初は長野県を通せということと言われて長野県を通していたのですが、長野県ってご承知の通り市町村が77もあるのですよ。昔のT知事の名残ですね、まだ御礼があるような感じで。

県を通せと言われて、77の市町村が出てくるのを県は待っているのですよね。出てくるとそれを市町村の鞆に入れて、大体ぐちゃぐちゃとして、エクスバーの形を作って国に出してくる。最初それを2回くらいやられて、結果的に時間遅れだし面白味がないし、全部却下されたのですよね。そんなことしていたら私たちのアイデアが段々陳腐化していくし、市民のためにならないので、県に言って、「申し訳ないけれど国の方と直接やらせてもらいます」と、「県についてはもう黙ってくれ」ということで一回仁義を切って、それからもう直接国へ持っています。

持っていく時にも、資料を山ほど作ってということはしないで、ペーパー1枚で絵を描いて出しているのですよね。そうすると国のみなさんというのは当然クレバーなので、見た瞬間にわかりますので、これは採用、不採用ということだとぶんやっているとします。そんなことで県の方は申し訳ないですけれどということで、この件についてはやっています。

それから医師会ですけれど、おっしゃる通りで医師会もやはりこう最初は抵抗というか慎重だったのですけれど、たまたま私の知り合いの先生が医師会長をやったり、地域全体のもっと広範な医師会長をやったりしている先生がいたりして、丁寧に説明をして、その先生がまた違うドクターに説明をしてということで。だから先生たちもプラスになりますよということでやってきた結果、医師会ももう全面的に応援をしてもらって今やっています。

ただクリニックの場合には、自分のところの看護師が車に乗って往診をする、その間というのはやはり人手不足になるのですよね。自分の医院でもやりたいたいのだけれど看護師の数が少ないので出て行ってしまっただけでは困るということで、今共通の看護師を車に乗せて、どの先生から指示を受けてもできるようにしているのです。できれば車の運転までしてもらいたいなと思っているのですよ。比較的上手にやっています。

質問者（会場）：大変参考になりました、ありがとうございました。

三神さん：ありがとうございました。本当に話は尽きなくてまだまだ聞き足りないのですが、本当に貴重なお話をどうもありがとうございました。会場からのご質問も本当にありがとうございました。

司会者：それでは時間もまいりましたので、質疑応答を終了とさせていただきます。三神様もいかがでしょうか、まとめは。

白鳥市長：三神さん、まとめの前に1つだけ。国のみなさんもいると思いますので、地方都市がどんなに大事かということは口先だけでなく、本当に国全体として考えてもらいたい。つまり明治維新以降、地方から金も人も物も全て大都市に動いていて、まだこの姿というのは変わっていないのですよね。地方都市が小さくなって消えてしまうと、国そのものも駄目になる。これは自明の理なのですけれど、だから本当に地方都市をどうやってこれから維持していくのかということについては、本腰入れて考えてもらいたいというのが私のみならず皆様の共通だと思っておりますので、ぜひそこら辺をお願いしたいと思っております。

三神さん：そうですね。では最後に1つだけ加えさせていただくと、私は地方都市出身で、北海道だったり秋田だったりも住んでいたことがあるのです。国の委員会にいろいろご縁をいただいておりますが、たぶん役所の方大半が東京プラス3県出身で、東日本大震災があった時にこういうお話をして笑えた人が1人しかいませんでしたという例をみなさんに共有したいのですが。中央省庁から助っ人で被災地に行った方が、仙台から気仙沼まで地下鉄で何駅ですかと聞いて総スカンを。現実を知っていると失笑してしまいますよね。

そういう風におっしゃった方がいるくらい、地理的感覚もそうですし山手線の中だけの感覚でやってはいけないなということは本当に私も伝えていきたいと思っております。今日は中央省庁の方もいらしているので、ぜひ。日本のリアリティは地方都市にあると思っております。貴重なご意見、どうもありがとうございます。何のまとめにもなっておりませんが、感想になってしましまして申し訳ありません。本当に今日はどうもありがとうございます。

司会者：どうもありがとうございます。それでは、以上をもちまして第二分科会の第2部を終了とさせていただきます。